

4. 四万十川流域の祭祀遺跡 - 主に石を用いた祭りについて -

具同中山遺跡群は、高知県下でも最大規模の祭祀遺跡である。祭祀の主体となるのは古墳時代で、これまでの調査で多くの祭りの跡が確認されている。また1991年度の具同中山遺跡群の調査では、弥生時代の祭祀跡とみられる遺構が数基検出されている。今回の調査でも弥生時代終末期の祭祀的性格を持つ遺構・遺物が検出されており、具同中山遺跡群で祭祀が行われた時期は弥生時代まで遡ることは明らかである。

高知県の祭祀遺跡に関する研究は古墳時代を中心に既に行われている⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾。本項では先学の研究を参考に、具同中山遺跡群をはじめとする四万十川下流域の祭祀遺跡について、時代ごとにみていくたいと思う。本調査区で石を用いた祭祀跡とみられる遺構が検出されていることから、特に石を配するものに重点を置くこととした。

さて、論を進める前に祭祀遺跡の定義について若干触れておきたい。大場磐雄氏は祭祀遺跡とは「神祭りを行ったことを考古学上から立証し得られる跡」との見解を示している⁽⁴⁾。考古学上それが神祭りであったかを立証することは難しいが、非日常的な遺構や遺物のあり方が認められるもの、祭祀遺物とされるものが出土する遺跡、これらを祭祀遺跡とし論を進めることとする。

(1) 縄文時代

石を用いた祭りである配石遺構は、縄文時代から四万十川流域でも確認されている。ただし西日本の配石遺構は東日本のそれと比べ、小規模で数的にも少ないと言える⁽⁵⁾。

現在四万十川流域で確認されている配石遺構を持つ遺跡には、愛媛県北宇和郡広見町岩谷遺跡、高知県幡多郡西土佐村大宮・宮崎遺跡などの遺跡があげられる。また、中村市国見遺跡でも縄文時代の集石遺構が2基検出されているが、祭祀との関連は不明である。

岩谷遺跡は四万十川中流域、支流広見川左岸の河岸段丘上に所在し、縄文時代後期を主体とする遺跡である。配石遺構は全部で5基検出されており、出土遺物から後期中葉～後葉に構築されたものと考えられる。最大のもので径4.6mを測り、形状は円環状、円環状列石、集石、組石状を呈する。配石を構成する礫は拳大から人頭大のものが用いられる。これらの配石遺構内からは焼土や木炭片が出土している。また第4・5配石遺構は、10cm以下の小礫を中心として石が配されている点は興味深い⁽⁶⁾。

大宮・宮崎遺跡は四万十川中～下流域の支流、目黒川右岸の河岸段丘裾野に発達する低地に立地する。縄文時代後期を主体とする遺跡で、19基の配石遺構が確認された。形状は調査者によってA～D類に分けられ、A類：円環状を呈し内部に1～2個の石を配するものと配さないもの、B類：円環状を呈し内部に石を散在配置するもの、C類：U字状を呈するもの、D類：環状が崩れ不定形のものとされている。そのうち主体を占めるのがA類である。これら配石遺構の構築時期は後期中葉の平城式に初現があり、後期後葉の片柏式期に増加する。そしてその次の伊吹町式の段階には13基の配石遺構が存在し、この時期がピークであったと考えられる。更に検出された配石遺構のうちの2基からは晩期土器も出土しており、伊吹町式段階で最盛期を迎えた配石遺構

の構築はその後衰退をしつつも、晚期の突帯文期まで存続していたことが明らかとなった。宮崎・大宮遺跡では住居跡など生活に関する遺構は確認されておらず、調査者は本遺跡の性格を共同祭祀場と考えている⁽⁷⁾。

一般的に配石遺構などの儀礼施設や儀具は、縄文中期末から後期（中には晚期まで）に盛行し、弥生時代への移行に伴い姿を消すと言われる。こういった傾向は四万十川流域の様相とも符合する。四万十川流域の配石遺構は、現在のところ後期中葉に初現があり、後期後葉にかけて盛行し、晚期には衰退していくとみられる。今後の調査によって初現の上限は更に遡る可能性もある。また宮崎・大宮遺跡では晚期の祭祀の痕跡を見ることもできるが、それも配石遺構19基中2基と前時期に比べ著しく減少する。

儀具として用いられたと考えられる石棒は、宮崎・大宮遺跡では第11号配石からの出土が確認されている。これは後期後半以降に多い住居跡外出土例の一つである。石棒が出土した配石遺構11号は、出土土器から後期後葉に構築、使用されたものとみられる。この配石遺構からは晚期土器などは全く出土せず、宮崎・大宮遺跡では石棒を用いた祭祀は晚期まで引き継がれることはなかったと考えられる。同じ四万十川下流域に所在する中村貝塚では、縄文時代晚期の粘板岩製の石剣が出土している⁽⁸⁾。この石剣は一側縁にのみ刃部があり、柄部には沈線を施している。柄部に施された格子状の沈線は、それ自体に儀具として何らかの意味があったとも考えられるが、同様の格子状のモチーフを持つ深鉢が出土していることから、同じ格子状のモチーフを使う土器集団によって製作されたものと考えられる。

縄文時代晚期～弥生時代前期にかけての遺跡である入田遺跡では、配石遺構などの祭祀跡は確認されていないが、石棒状石器が表面採集されている⁽⁹⁾。この石棒状石器の用途は不明であるが、祭祀と関連するものの可能性もある。その一方で稻作が行われていたことを示唆する遺物が出土していることから、入田遺跡は縄文時代の要素を残しながらも、弥生時代へと移り変わる過渡期の様相を呈していると考えられる。

（2）弥生時代

四万十川流域の弥生時代の祭祀については、遺跡数も少なく不明瞭な点が多いと言える。特に弥生時代前期の祭祀遺跡の調査事例は、皆無と言ってよいだろう。縄文時代晚期から弥生時代前期は時代の変換期にあたり、稻作の本格的な開始など大陸からの新しい文化の受容期である。こうした社会情勢の変化の中で、祭祀形態にも何らかの混迷があったとも考えられる。弥生時代中期については、2000年に中村市教育委員会によって古津賀遺跡群ナルザキ地区の調査が行われ、竪穴住居跡を含む集落遺跡が確認されているが、当該期の祭祀については依然不明な状況である。

四万十川下流域で再び祭祀と関連する遺跡が出現するのは、弥生時代後期になってからである。中村市石丸遺跡、山路遺跡から銅矛が出土しており、当該期に青銅器を用いた祭りが行われていたことは明らかである。また1991年度の具同中山遺跡群の調査では祭祀跡として、土器とともに焼土・炭化物の集積、集石が検出されている⁽¹⁰⁾。弥生時代後期になると中村市でも、四万十川、中筋川流域を中心に遺跡数が増加する傾向にある。

石丸遺跡は中筋川左岸の川辺に立地する。銅矛は昭和26年の中筋川堤防造成工事の際発見されたもので、中広形銅矛式が出土している。

一方山路遺跡で出土した銅矛は中広形銅矛式で、高知県下に広く分布する型式である。山路遺跡は四万十川右岸の山丘上に立地し、中世の山路城跡の一画を占める。銅矛が出土したため埋納遺跡とされているが、発掘調査によって出土したものではなく確証はない。出土した銅矛は穗部先端が欠損しており、近い場所に後世穿たれた孔が左右に認められる。これらは御神体などを神殿につるす双孔と同一であることから、山路の集落付近で発見されたものが、中世に山路城の城八幡で祭られていた可能性も考えられる¹⁰⁾。

高知県西部で銅矛の出土が確認されているのは、中村市と高岡郡窪川町である。高知県西部地域は銅矛の分布圏に入り、九州勢力との関係が従来より指摘されてきた。しかしながら西に近く、四万十川の下流域に位置する中村市内での青銅器の出土数は2点にとどまるのに対し、上流域の窪川台地では高知県出土の約半数を占める銅矛の他、銅戈3本が出土しており、圧倒的に窪川台地に青銅器が集中している。同じ水系において、両地域間にみられるこのような銅矛の偏重はどのような要因によるものであろうか。

まず各流域の遺跡の立地及び特徴を見ていくことにする。中村市と窪川町は四万十川という同じ水系の下流域と上流域である。下流の渡川大橋から上流の銅矛出土地付近まで河川長で約90km離れており、上、中、下流域では遺跡の立地などに大きな違いが認められる。下流域は中村平野など比較的広い平野部があり、200を越える遺跡が確認されている。これらは時代的に偏重はあるものの、縄文時代から近世に至る各時代の遺跡が認められる。その中には弥生時代の遺跡も30遺跡前後あり、四万十川、中筋川、後川などの川沿いに立地する。弥生時代の遺跡は比較的小規模で、核となるような集落遺跡は現在のところ確認されていない。一方四万十川が蛇行を繰り返す中流域では、この水系に多く発達している河岸段丘上に縄文時代の遺跡が立地し、丘陵、尾根を中心の中世の城跡が多く認められる。四万十川中流域では縄文時代、中世の遺跡が圧倒的多数を占め、弥生時代の遺跡は皆無であるのが興味深い。中流域の発掘調査はほとんど行われておらず、弥生時代四万十川上流と下流をつなぐ地域として今後の調査が期待される。窪川町を中心とする四万十川上流域では、川沿いに縄文時代、弥生時代の遺跡が、丘陵部には中世の城跡が多く認められる。弥生時代の遺跡は支流同士、または本流と支流の合流点、及び川の蛇行の内側に多く所在しており現況は田畠である。遺跡数は50遺跡程度と四万十川下流域に比べ少ないが、弥生時代の遺跡は18を数え、割合からすると多くなる。また銅矛出土地周辺に弥生時代の遺跡が集中するのが特徴である。これらの遺跡の中には弥生時代中期～後期にかけての標式土器である、神西式土器の出土した神西遺跡がみられる。

次に銅矛祭祀についてであるが、銅矛祭祀は大陸文化の伝播の後に始まった、農耕（特に水田耕作）を生業とする人々の祭りであったと考えられる。出土した銅矛は埋納したとみられる状態のものが多く、威信財としてではなく集団の祭りで使われたことは間違いないだろう。農業生産力の高さが富の余剰を生み出し、それによって力を蓄えた有力者が人心掌握のために青銅祭器を求める、という構図が成り立つとすれば、両地域にみられる青銅器の偏重の要因の一つとして農業生産力の

較差が考えられるのではないか。弥生時代の考古資料から両地域の農業生産力を測ることは不可能であるため、中世の文献史料を元に両地域の耕作面積を大まかにではあるが割り出こととした。資料には全県下的に行われ、総合性の高い長宗我部地検帳を中心に用いた⁽¹⁾⁽²⁾。

現在の中村市の大部分を占める幡多郡中村郷・山田郷と、現在の窪川町にあたる高岡郡仁井田郷の耕地面積は、中村郷・山田郷では田が約1,360町、畠は約408町8反を測る。対して仁井田郷では田約962町2反、畠作は気候的に適さなかったよう畠約95町5反と前者に比べ少ない。ただし長宗我部地検帳で明らかになるのは田畠、屋敷地などの検地面積であり、実際の生産量についての記載は無い。長宗我部地検帳が等級と等級別地高が石盛の役割を果たしたことが特徴であることから、更に収穫量と関連するとみられる両地域の上(上々)中、下(下々)田の等級別地高の統計をとると、中村郷・山田郷では上(上々)田：中田：下(下々)田=2:3:5、仁井田郷では1:3:6となる。開墾されたばかりの水田は上田とはなり難く、仁井田が「新田」から転訛したと言われるように、古代末以降の新田開発により水田として利用され始めたことが、地検帳からも窺える。仁井田郷における耕地面積は、長宗我部の地検後では約2~3倍の伸びが認められる。ただし田一枚分の面積は狭く、総合的な耕地面積も狭い。等級からみても下田が6割を占め、中世段階においても収穫量は低かったことが窺える。

また山田郷森沢村(現中村市森沢)の場合は、田一枚分の面積に分、匁などの細かい単位が認められず、代の単位でも10代、20代などといった端数のない面積のものが比較的顕著であった。こういった傾向は上田・中田に多く見られ、中村郷(旧中村町周辺)でも同様に看取できる。

以上のことから、中世においては四万十川上流域より下流域のほうが米の収穫量は優勢であったことは明らかである。中世にみられる両地域の較差が、そのまま弥生時代に適応できるかどうかは不明であるし、収穫量の高低だけでは測れない付加価値が存在したのかもしれない。しかし単に農業生産力の高い地域が青銅器の集中地域とはならないということが想定できる。

ただし上の収穫量の対比は風水害の無い場合に限ってのことであり、その年の自然状況によっては収穫量の較差も縮まった可能性もある。四万十川流域では長年水との戦いを強いられてきた。中村市では古くは万治元年(1658)9月16、17日の大風雨洪水によって幡多郡の田地約8,000石が被害を受けたことが『御家年代略記』に記されている。また寛文6年(1666)8月4、11、15日の洪水によって、中村の田畠3万石が被害を受けている(『徳川実紀』)。またこれほどの大被害ではないものの、洪水は度々付近の集落を襲ったとみられ、1658年以前にもこのような被害はあったはずである。弥生時代後期から四万十川下流域の洪水多発地帯でみられる、祭祀行為の意図するところも無関係ではないだろう。

(3) 古墳時代

古墳時代に入ると具同中山遺跡群、古津賀遺跡を中心に、多くの祭祀遺構が検出されることとなる。それらの多くは中筋川、後川といった四万十川支流の川沿いに立地しており、いずれも近年まで洪水被害を受けた地域である。

具同中山遺跡群では4世紀~6世紀を中心に、多くの祭祀跡とされる遺構がこれまでの調査で

確認されている。これらの祭祀について出原恵三氏は『考古学研究』の中で、祭祀形態を～類に分類されている⁽¹³⁾。出原氏は5世紀後半を境に形態のあり方に大きな差異があるとし、類の川岸の斜面・溝・川底に多量の遺物がみられる祭祀形態を古く位置づけられた。そして5世紀後半以降の祭祀については～類があり、水平面に一定の祭祀空間が設定されるという共通の特徴を持つ。そのなかでも祭祀遺物を多く用いて比較的狭隘な空間で祭祀を行う・・類と、これらに比べて広い空間を占め日常什器が遺物の主体を占める類に分けられている。

古津賀遺跡では1986年度の調査で12箇所の祭祀跡が確認されている。古津賀遺跡での祭祀は5世紀後葉に開始され、6世紀前葉に盛行期を迎える。その後祭祀は6世紀中葉には衰退していき、後葉には終息するといった変遷を辿る。出原氏の分類に依ると古津賀遺跡の祭祀形態は第類、つまり祭祀空間として方形状に周囲を囲む柱を伴うものから始まる。具同中山遺跡群でみられた河川の斜面や溝・川底などに廃棄する例は認められない。

また、具同中山遺跡群より1km下流には前述の石丸遺跡があり、5世紀代のものとみられる住居跡2棟、炭化物・焼木などが検出されている。住居跡の1棟からは高杯、深鉢形土器の他、手捏土器、石製臼玉が炉跡付近から出土しており、火に関する屋内祭祀の可能性が指摘されている⁽¹⁴⁾。

(4) 古代～中・近世

具同中山遺跡群では1989、1990年の調査で、集石遺構が25基検出された。また具同中山遺跡群の対岸に所在するアゾノ遺跡では、長径1.47m、短径0.7mを測る中世の配石遺構が1基検出されている。10～15cmの河原石と須恵器片が敷きつめられ、大部分は炭化物に覆われていた。築造時期は14世紀後半から15世紀前半とみられる。ただしこれらの集石遺構・配石遺構中には墓の可能性のあるものも含まれており、祭祀と関連するものかは不明である。

具同中山遺跡群の対岸に所在する風指遺跡では、斜面堆積から縄釉陶器が出土している。これは報告者によって官制の祭祀の可能性が指摘されている⁽¹⁵⁾。律令祭祀に使用されたと考えられる祭祀遺物には、古墳時代から続く土馬、斎串、鳥形、武器形などの他、新たに人形の木製品がみられるようになる。1996年度に調査された具同中山遺跡群の自然流路からは、武器形木製品が、中筋川を挟んで対岸にあたる船戸遺跡の自然流路からは人形、武器形の木製品とともに呪符も出土している⁽¹⁶⁾。

(5) まとめ

以上、縄文時代から中・近世にかけて、四万十川流域の祭祀遺跡について若干ではあるがまとめてみた。四万十川流域では、縄文時代後期～晚期まで祭祀遺構である配石遺構が認められるが、弥生時代前期から中期にかけては祭祀の有無自体が不明瞭となる。弥生時代前期は新しい文化の受容期であり、中期には高地性集落が出現するなど、社会的に不安定な時期にあたる。祭祀の不明瞭さの背景には、こういった社会的な変容があったと考えられる。弥生時代後期になると南四国では青銅器を用いた祭りが現われる。ただし銅矛祭祀の行われた場所や、それに伴う祭祀遺物は不明である。また銅矛の埋納地については今後の課題である。次に祭祀の跡が確認されるのは

弥生時代後期からであり、この時期の祭祀形態は古墳時代のそれと類似している。弥生時代には既に祖型があった可能性が高い。

祭祀形態の変化の裏には、生産力の向上に伴う社会の発展などの要因がある。また祭祀を執り行う人物も、時代とともに変わっていったと考えられる。興味深いことにそういった変化の中で、四万十川流域では縄文時代から川辺での祭祀跡が連綿とみられるのである。

5. 具同中山遺跡群 の位置付け

前項では四万十川下流域の遺跡にみられる祭祀の変遷についてみてきた。それでは弥生時代終末～古墳時代初頭の祭祀関連遺跡とした本調査区は、祭祀の変遷の中でどのように位置付けられるであろうか。

今回の調査では1・2区合わせ34箇所の炭化物集中とともに、遺物がまとまって出土した。遺物はその出土状況から、大まかに12ブロックに分けることとした。またこれら遺物集中部付近には住居跡などの掘り込み遺構は伴わず、屋外で行われた祭祀であったと考えられる。炭化物集中部に関しても堆積は薄く、居住施設に伴う屋外炉のような石組み施設も検出されていない。

遺物の集中は微高地上にあり、後背低地に落ち込むに従い遺物は全くみられなくなる。そして土壌のグライ化が著しい地点では、日常生活と関連するとみられる遺構（SX1・2）が検出されている。SX1・2の性格は明確ではないものの、この土地が祭祀のみに使用された場所ではなかった可能性がある。微高地上で出土した遺物には、一個体で検出された甕の周辺で叩石など拳大の円礫が出土する例がある。本調査区で出土している弥生時代終末～古墳時代初頭のものとみられる土器片は、他の時代のものと比較しても非常に細かな破片であることから、意図的に破碎行為が行われた可能性も考えられる。意図的な破碎とは多くの場合、祭祀行為の一つと言える。これらのことを考え合わせると、遺物集中部は生活の場ではなく、祭祀を執り行う場所であった可能性が高いのである。

次に12ブロックに分けられた出土遺物についてみていくと、遺物は土器、石製品、木製品、骨片などがあるが、主体となるのは土器である。土器は壺、甕、鉢、甑、高杯、手捏土器である。これらの土器の器種構成には偏りがあり、弥生時代終末～古墳時代初頭とみられる1区では、壺5%、甕66%、鉢23%、甑3%、高杯2%、手捏土器1%と、甕が突出して多い。今回復元図示できなかった土器片なども、甕の器壁に見られる調整痕や煤の付着から甕とみられるものが多く、甕の占める割合は更に増えるものと考えられる。一方古墳時代初頭とみられる2区では壺5%、甕54%、鉢29%、甑2%、高杯5%、手捏土器5%と、1区に比べ甕が減少し鉢が増加するのが特徴である。また微量ではあるが高杯も増加傾向にある。それでも甕が全体の5割に達し、甕に次いで出土点数の多いのが鉢である。また1・2区とも出土遺物のうち甕、鉢の占める割合は、1区で9割近く、2区では若干甕が減るもののが8割を占める。祭祀遺物と言えるものは全体の1割にも満たず、9割以上は日常什器である。また炭化物集中17からは加飾した壺の粘土帯とみられる細片が出土しているほか、東阿波型土器など地域間交流を考える上で貴重な搬入資料も出土している。